

オンライン学習の研究活動を支援するコミュニティ形成要因の検討 —大学院の事例をもとに—

Factors to Support a Research Community in Online Learning -From a case of a graduate school -

根本 淳子^{*1}, 竹岡 篤永^{*1,2}, 井ノ上 憲司^{*1}, 久保田 真一郎^{*1}, 柴田 喜幸^{*1,3}, 鈴木 克明^{*1}
Junko NEMOTO^{*1}, Atsue TAKEOKA^{*1}, Kenji INOUE^{*1}, Shin-ichiro KUBOTA^{*1},
Yoshiyuki SHIBATA^{*1,2}, Katsuaki SUZUKI^{*1}

^{*1}熊本大学大学院 教授システム学専攻

^{*1}Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University

^{*2}九州大学 経済学研究院

^{*2}Faculty of Economics, Kyushu University

^{*3}産業医科大学

^{*3}University of Occupational and Environmental Health

Email: nemoto@kumamoto.ac.jp

あらまし: 本発表では研究活動の支援を目指し, これまで取りくんだアンケートとインタビュー調査を踏まえ, 研究活動を促す要因と支援策について検討した.

キーワード: 研究活動支援, コミュニティ, インタビュー調査, eラーニング, オンライン学習

1. はじめに

本研究は, 主に遠隔で研究活動を進める社会人大学院生を対象に, ①研究活動を支援するコミュニティづくりに必要な成功要因の整理, ②コミュニティの事例構築を目指している. これまで筆者らは遠隔での研究活動経験者にアンケートを実施し, 活動支援の強化や改善点を検討してきた(1). 本発表では, アンケート参加者の中から協力者を募り実施したインタビュー内容を中心に, 研究指導を目的とした既存科目(特別研究Ⅰ・特別研究Ⅱ)の改善と追加支援の検討結果と, オンラインでも活発・創造的な研究活動を支援できる仕組みの検討の結果について報告する.

2. インタビュー調査

2.1 インタビュー概要

大学院修士課程で特別研究Ⅰ・特別研究Ⅱの学習経験者を対象に実施したアンケート協力者の中からインタビュー協力者を募った. 在学生3名と修了生2名の計5名が応じ, それぞれ, 30分から1時間程度の対面インタビューを実施した.

特別研究Ⅰ・特別研究Ⅱを進めて行く中で特に印象に残っている点, そこから見出せる改善のヒントを中心に半構造の形式で実施した. 当該科目での具体的経験について語ってもらうことで, そこで感じた気持ちや気づいた点などに触れてもらえるようにした. インタビュー結果は文字に書き起こし, 「インタビュー内容の特徴」, 「参加者の学習経験をしたときの気持ち」, 「参加者からの改善案・要望」, 「その他」の4つの視点で分析した(表1).

2.2 インタビュー結果

当該科目を通じ取り組んだ研究活動は異なるが,

これまでの社会経験や研究経験を踏まえ, 各自が予想・期待した活動について議論が展開されていった.

異なる経験や考えを持っているにも関わらず, 対話の中からは成功体験を得るための重要な共通点を確認することができた. 社会人経験のある学習者は, 必要がないと考えられる活動は, 教員とのやり取りであっても最低限に抑えようという意識が強く働いていた. しかし, 実際には小まめなインタラクションやフィードバックを求めていた. また, 全体像や求められている成果のレベルが見えないことに対する不安や疑問が生じ, 学習者のモチベーションを下げ, 結果進捗が遅れる要因となっていることも明らかとなった. 研究科目に取り組むまでの他の授業科目では, 課題や締め切りが詳細に設定されているが, 研究活動では, 内容によって活動内容が異なり自由度が高く, マイルストーンを提示し, 研究活動を遂行する手がかりとなるガイダンスを適時挿入することが必要であることもわかった.

3. 今後の課題

次の課題として, これまでの調査から導きだされた対策案を踏まえ科目改善を行うことが挙げられる. 成功要因に必要なだと想定される対策の効果について実践を通じ確認していく.

謝辞

本研究は, 放送文化基金 平成 22 年度 助成金を受けて実施している.

参考文献

- (1) 根本淳子, 竹岡篤永, 井ノ上憲司, 久保田真一郎, 柴田喜幸, 鈴木克明: “研究活動を支援するイノベティブなコミュニティ形成の要因調査”, 育システム情報学会研究報告 Vol 26, No.5, pp.75-76 (2012)

表1 インタビュー結果まとめ

氏名	特徴	気持ち	改善案/要望	その他(意見や不満など)	対応策として考えられること
Oさん	<ul style="list-style-type: none"> 教員の対応の速さが動機づけに関係した経験談が中心 	<ul style="list-style-type: none"> 社会人ではあるが、学生という立場に立ったため、積極的に行くべきだと理解しつつ、当初は先生へのコンタクトを遠慮した 一人で進めていくため孤独と感じた 	<ul style="list-style-type: none"> 教員から学生に対するレスのルール化(例:48 時間以内に必ず返事する) 教員研究紹介の内容を更新 対面の機会(合宿など)まで、教員からもコンタクトを取るよう配慮が欲しい 	<ul style="list-style-type: none"> 事務運営全般の弱さを指摘 レスポンスが遅いとモチベーションが下がる 指導担当教員の決定後、公的に会える機会まで半年ある 新設大学院という言い訳はもう通用しない 	<ul style="list-style-type: none"> [特別研究 I]指導担当教員の確定直後にあいさつの機会を挿入 学生と教員とが互いに自己紹介をしよう コミュニケーションの取り方などの確認
Pさん	<ul style="list-style-type: none"> 論文の種類(修士論文と特定課題)の違いに関する混乱:博士課程進学に関係するため 研究に関する基本やアプローチ(研究論と研究方法)についての理解不足や誤解 内容よりも事務的な部分に対する指摘(専攻全体に関して) 対面の効果(オンラインとメールのやり取りの違い)について指摘 	<ul style="list-style-type: none"> 気軽さはない(キャンパスであって話しかけるような) 聞いても良いものか迷う(遠慮) コンテンツは自由度が高い 必要のないやり取り等のコストは最小限に抑えたい 	<ul style="list-style-type: none"> テーマ選択の段階で、教員からアドバイスを得る アドバイスが欲しい(例:オフィスワー、電子図書館利用法) 実際の研究活動をタスクや練習として盛り込む(例:GINii など論文検索の仕方) 成果物などの明確化 (詳細な)マイルストーンの設定 小グループ単位で話し合う機会 教員やピアとの定期的なインタラクティブ 特別研究 I の早期公開 	<ul style="list-style-type: none"> [特別研究 I&II]ティップスを挿入 オフィスワーの活用ガイド 電子図書館の利用方法 論文検索のアドバイス [特別研究 I&II]全体スケジュールの提示 課題の内容と適切 学会発表などのマイルストーン 	
Qさん	<ul style="list-style-type: none"> 自分の担当教員のゼミに対するアプローチにLMSの仕様(15回という授業の標準的進め方)がマッチしていない点を指摘 	<ul style="list-style-type: none"> 進捗がシステム上で十分に可視化されなかったため、メンタル的に辛かった 最初のハードルが高く進捗がすぐ遅れた印象を持った 	<ul style="list-style-type: none"> 人の行動特性や動機づけ理論に則って進め方が望ましい LMS の改善:15 回に限定しないなど多様なゼミスタイルへの対応 	<ul style="list-style-type: none"> 学びの動機づけの根底には「気持ち」がある 	<ul style="list-style-type: none"> [特別研究 II]教員の指導スタイル(あるいは学生の進捗)に合わせて LMS 利用に自由度を持たせる(例:1 回のスレッドで十分議論がされた場合、複数回分とみなす) [特別研究 I]基礎内容(1ブロック)を増強 3 回から9回程度に拡張 実践に必要な演習を追加
Rさん	<ul style="list-style-type: none"> 自分の教員経験や一般的に行われている研究指導(研究基礎に関する指導など)を踏まえて、本課程での実践を分析 	<ul style="list-style-type: none"> 改善が必要だと感じた(別組織の運営者の立場が中心から) 	<ul style="list-style-type: none"> 教員紹介の回数の縮小(15 回中 3-5 回程度) 教授システム学研究法は 3 回ではなく最低 8 回ぐらいい実施 最低でも 8 回ぐらいいは実験計画、研究計画、ミニレポートの実施を 	<ul style="list-style-type: none"> 教授システム学研究法という基礎部分が 3 回分では修論を書く力が身につかない場合がある 各自が取り組む研究に特化した方法は特別研究 II で行わないのか 	<ul style="list-style-type: none"> [特別研究 I]基礎内容(1ブロック)を増強 3 回から9回程度に拡張 実践に必要な演習を追加
Sさん	<ul style="list-style-type: none"> 不完全燃焼的な印象 	<ul style="list-style-type: none"> 教員へ意見を出しにくい 面倒な気持ち + 遠慮 取り組み方の違いにうまく順応できず(授業型科目と研究型科目)お客さんモード(受け身的)になってしまった ゼミという意識がなかった 	<ul style="list-style-type: none"> 教授システム学研究法という基礎知識部分を前期の半分を考えてじっくり行うーこれによって考える時間を与えるため/研究者としての心構えをつくり自分の関心分野を絞り込むため グループ間で意見を交換しよう 	<ul style="list-style-type: none"> イベントが少ない 特別研究 I(初期段階)で適応できた人は最後までうまくいく テーマ決定時に担当教員と合意ができず後で迷いが出る(科目内に相談する機会がない) 	<ul style="list-style-type: none"> [特別研究 I]基礎内容(1ブロック)を増強 導入部分の解説を充実させる 3 回から9回程度に拡張 練習問題とアドバイスを追加 [特別研究 I]研究を始めるにあたっての心構えを追加